

はじめに



滋賀県は、琵琶湖を真ん中にして、周囲に県土の約半分を占める山々と、そこから広がる平野と河川が一体となった多様で豊かな自然環境を有しています。滋賀の水の文化や多様な生き物を育てている琵琶湖は、近畿

圏約1,450万人の生活と産業を支える水源であり、治水機能や観光資源など様々な役割を担っています。

私たちには、100年後、200年後も琵琶湖をはじめ、県土の美しい姿を引き継いでいく責任があります。

しかし、琵琶湖やそれを囲む森、川、里の抱える課題は複雑化・多様化の一途をたどり、解決に向けて待ったなしの状況にあります。

この琵琶湖は現在、水質が改善する一方で、アユの不漁が平成28年末から昨年にかけて生じるなど、漁獲量の減少が続くとともに、水草が大量繁茂するなど「生態系のバランスが崩れてきた」状態にあります。また、県内では、野生鳥獣による農林水産業への被害や、廃棄物の不法投棄などの様々な問題が依然として発生しています。

世界に目を向けてみても、気候変動に関連すると考えられる異常気象は激化しており、地球温暖化によるリスクが大きな懸念となるなど、環境をめぐる課題は山積しています。

そのような中、琵琶湖で大規模な赤潮が発生してから40年を迎えた今年度は、琵琶湖の保全再生に関する計画を策定し、本格的な取組を開始する節目の年となりました。

これを契機に、滋賀県では、琵琶湖と共に生き、環境や生き物のことも考えながら、人と人が支え合うことを大切にする私たちの営みを、持続可能な社会づくりのモデルとして発展させようとして取り組んでいます。これを「琵琶湖新時代」と表現し、未来と世界とのつながりを重視して、社会的包摂、経済成長、環境保護の3つを統合的に解決することをめざす国連の持続可能な開発目標（SDGs：Sustainable Development Goals）の視点を取り込んだ取組を進めているところです。

本県もSDGsの取組に率先して参画する中で、「第四次滋賀県環境総合計画」に基づく「めぐみ豊かな環境といのちへの共感を育む社会」の実現に向けた施策、琵琶湖保全再生計画で掲げた「守るために活かす」施策を本格的に開始し、森、川、里、湖のつながりや暮らしと湖とのつながりの再生を進めてまいります。

こうした滋賀の未来像を実現するためには、県民、事業者、NPOの方々々と課題を共有し、一緒に行動すること、パートナーシップが何よりも大切です。

本書が、環境保全や琵琶湖への関心と理解を深め、今後の活動に大いに活用されることを願っています。

平成30年(2018年) 3月

滋賀県知事

湖大造